

猫  
山

鼓膜の直前で動いている。羽根が震えている。電動みたいに小刻みに同じリズムで震えている。汚れた白い鱗粉が粘膜に貼りつき、低い前足が鼓膜に触れそうな手前で微かに動いている。羽音が執拗に聞こえる。外界の音を遮っている。生きた音が唸っている。粘膜が鱗粉で埋められていく。……蛾。蛾だ。壁に貼りついていても見落としてしまう蛾。指で潰しても傷みさえ感じられない蛾が、耳の中にいる。追い出そうとして喉元を掻きむしった。耳には指を突っ込めない。ささいなことで蛾は鼓膜に触れてしまうだろう。混乱して鱗粉を撒き散らすだろう。喉元に爪あとがつき、ミミズ腫れに進行している。それでもかまわず掻きむしった。羽音は大きくなっている。前足を互いに擦り合わせている。歯を食いしばった。粘膜が灰色に乾燥していく。喉の奥がかゆくなった。外から喉を掻きつづけた。

声をあげた気がする。目が開いた。ガ、と叫んだのだろうか。曖昧に何か言葉を発した感じがする。カーテンから光が射し込んでいる。車の走る音がした。蛾の羽音なんてしない。おそろおそろ耳に指をやった。湿った粘膜を感じる。灰色の鱗粉などない。深い溜息がもれた。ベッドから立ち上がり、洗面台の前に立った。鏡を覗き込み、喉元を見た。爪あともミミズ腫れもない。ヒゲを剃り、顔を洗った。頬がこけただろうか。目の下に隈があるだろうか。顔を横に向け、鏡の中の自分を覗いた。光の屈折のせいにして、洗面台から離れた。

三日ほど溜め込んだ洗濯物を洗濯機から出した。寝る前にセットしておいたせいか、すっかりきれいになっている。洗濯物一枚一枚を取り出し、カゴに入れる。濃紺のベストにスラックス、三枚の白いワイシャツ、靴下、下着、ハンカチ。本当はベストもスラックスもクリーニング屋に出さなければならないのに、面倒で何もかも洗濯機に突っ込んでしまう。見栄えも、きれい汚いという問題も関心なかった。洗剤を入れすぎたせいか、強い香水に似た匂いが漂っている。洗濯機のすぐ横の窓を開け、外に置いてあるテーブルにカゴを乗せた。

日は充分注がれている。草の緑が眩しい。玄関から見える遠い山の色も深く鮮やかだ。吸い込んだ空気が体に染みわたる。爽やか。職場ではうんざりするほどミートソースやカレー、コーヒー、チーズの入り混じったにおいを嗅いでいるせいか、何も無いにおいがいとおいしい。草の緑から新鮮な空気が送られてくる気がする。雑踏に溶け込むのもいいが、生活するのは自然に囲まれているほうがいい。猫がいるという以外は……。淋しいのは夜だけで、それほど悪くない。そう実感できるのは、完全な一人暮らしに入ったせいだろう。

洗濯物を干し終わると、家の周辺を歩こうとして足をとめた。物干竿の足元にはふたつのゴミ袋が置いてある。置きっぱなしなのだ。生ゴミとは区別してあるものの、燃えないものとの区別はしていない。透明な大きな袋に無造作に詰め込んだだけだ。冷蔵庫に貼ってあるゴミ収集の日程表を思い出した。詳しい曜日や時間を思い出せない。果たして……。よく見ると、生ゴミの袋が破れている。ビニールが噛み切られ、中からアオカビが生えたような色のどろっとしたものが流れ出している。鼻を近づけたら、吐き気が込み上げて顔をそむけた。たぶん、レトルトのグラタンだろう。一週間前ぐらいに食べた気がする。猫の仕業だ。他には考えられない。このへんには猫が多いのだ。近くを歩くと必ず見かける。

私は猫が大嫌いだ。幼い頃から猫が近くにいることが多かったが、可愛いと思ったことはなか

った。生理的に受けつけない。抜け目のなさそうな目といい、物欲しそうな鳴き方といい、立った耳や柔軟な体つきといい、目にしただけで気分が悪くなりそうだった。家には猫が集まってきた。私とちがい、母は大の猫好きであったのだ。私の見ていないところで、餌を与えていたらしい。先週、洗面台の下に置かれていたキャットフードの缶詰十缶と乾燥した餌を、職場の猫好きの同僚に渡したばかりだった。

裏口の前に、ふやけた餌が地面に馴染んでいる。足で踏み潰した。突然、母の姿を思い出し、涙が目の縁まで一瞬にして込み上げてきた。二週間前、ここで確かに餌をやっていたのだ。十日前、母は事故死した。思い出があれこれ頭を過りそうになり、気移そうとして前を向いた。三メートルくらい離れたところに、白い子猫がいる。こちらを見ている。にゃあと鳴いた。鳥肌がたった。近くにあった石を投げつけると、すぐに背を向けた。

車で十五分ほどのところにあるマッサージ専門の『アクア』に向かった。長時間立っているせいか、足腰に鈍痛が走るようになった。『アクア』には何度足を運んだだろう。数えきれない。最初に受付で親切にしてくれたのは夏子であり、以来通いつめた。今月になってからは初めて向かう。鈍痛があること、両腕が重いこと、めずらしく目の奥が傷むこと。疲れが溜まっているのか、胃もしくしく痛む。体を軽くしたいし、夏子と話もしたい。葬儀以来一度も会っていない。研修で忙しいからと申し訳なさそうに言ったのが最後である。

車を路肩に寄せた。めまいがしたのだ。今朝はバターを塗ったトーストを食べただけだ。バックミラーを見た。顔に赤みがない。黄色がかった白といった具合だ。目が少し充血している。頭に手をやり、伸びかかった髪を乱暴に撫でた。今までやったことのない家事にまいつているのか。溜息がもれる。タフであることを自覚してきただけに、不調を感じて動揺してしまう。しばらく下を向き、深く呼吸をした。近いうちに夏子に来てもらおう。一日でもいい。そんなことを考えているうちに、気分がよくなってきた。車を発進させた。

『アクア』に入ると、受付に夏子がいた。私の顔を見ると、幼友達に会ったような笑顔を見せた。

「あっちゃん、元気にしてた？ 電話しようと思ってたの。でも、夜遅くじゃ悪いと思って。ごめんね」

夏子以外誰もいない。客もいない。波の音がラジカセから流れている。体の力が抜けるようだ。

「研修だったんだろ。最近、疲れが激しいんだ。むくむっていうのかな、仕事柄しようがないんだけどさ。しばらくここには来なかったし。マッサージが習慣てのもへんだな」

「疲れてるんでしょ。当たり前よね。あっちゃんのことだからだいじょぶだと思ってたけど、ひとりになってしまったんだもの。今日は特別に力入れるから……」

夏子は人当たりがいい。悪気がない。真剣に葛藤する様子はない。変わらない柔らかな口調は

安心感を与える。どちらかという目は垂れていて、口が大きい。頬についた肉が笑うたびに上にあがる。髪は肩より長いが、仕事中はひとつに束ねている。肉づきはいいほうだが、腕や足は締まっている。話しているときの三日月のような目が、愛らしい。

夏子は介護福祉の専門学校を出て、すぐにこの仕事に就いた。実習をしているうちに、自分は介護には向いていないことに気づいたのだそうだ。最初は見習いであった。先月マッサージ師の資格を取り、この『アクア』の仕事のほとんどをこなせるようになった。

いつものようにベッドに横になり、体を伸ばした。家にいるようで緊張感がない。両腕を垂らした。目を閉じると、浜辺にいるような気になった。瞼の裏に映る衰えることのない輝き。静寂のなかで囁く波の音。解放した空間。

「相当疲れがきてるんじゃないの？ わかるわ。仕事もきついんだし」

夏子に言われ、足や腕の筋肉が締まった。明日からマニュアル通りの日々が始まる。八時十五分に起き、九時半に家を出る。高級品ばかりを扱っているデパートの最上階に行き、レストラン街の洒落た一角でウェイターとして過ごすのだ。営業用の声に、決まった対応。必要以上に丁寧な言葉遣い。足や腕がきつく感じて、顔色は変えない。客は若い女が多い。見るからに気高い。化粧や洋服、装飾品はどれもブランドといった具合だ。こまめにカットされた髪も乱れる様子はない。抜け目なく世渡りもうまそうだ。レストランはそれほど高級ではないが、客は相当なものだ。デパートの影響だろう。冷たい美しさを兼ね備えた女には見飽きた。この『アクア』で夏子を見たときの新鮮さといったら……。

タオルを乗せた背中に、夏子はほどよく力を込めてツボを押した。一定の力と一定のリズム。男に負けないくらいだ。普段目にする装飾品のような女にはこんなことできないだろう。ピンクやブラウン系のマニキュアを塗った爪、指輪をはめた細い指は、銀製の軽いサインペンを手にするのが精一杯だ。力とリズムは心臓の鼓動のように衰えない。それが夏子であることを忘れそうだ。

「ねえ、痩せたんじゃない？ 触ってすぐわかったわ」

「……そうかな」

押し潰された声で言う。痩せた気はしなかった。食事は粗末なものだが、鏡に映る顔以外関心を持ったことがなかった。ズボンのウエストも緩くなった気配はない。今朝のめまいといい、不調であることは確かだ。思った以上、母の死が重いのだろう。鼓動が速くなった。

「体重計、そこにあるけど、はかってみる？」

そう言われて起き上がった。はかると五十五キロ。前は六十一キロあった。こんなものかとベッドに伏した。夏子が何キロかと聞くので、答えると、必要以上に声をあげた。

「あっちゃん、それじゃダメ。机に座ってる仕事でもないのに、ちゃんと食べなきゃ。いろんなこと重なってただでさえ大変なのに、仕事だって休んだらいいのに」

ろくな返事もせず、両腕を頭のほうへ垂らした。眠気はないが、妙にだるい。

「今度ね、また研修があるの。でも、近いうちに必ずいくからね、絶対」

夏子の熱心な口調が耳に響いた。足の筋肉を揉みほぐしている。丁寧に、力強く。自分から頼まなくても、夏子には気持ちが通じている。家に来てくれる。ごく自然なことのよう受けとめてくれたのだ。

突然、ゴォーとヘリコプターの旋回する音が聞こえた。強い音だった。

「ヘリが飛んでるよ、ヘリ……。なんでこんな近くで？」

「何言ってるのよ、ヘリコプターなんて飛んでないけど、寝ぼけないでね」

夏子の声は明るかった。

瞼の裏に光を感じる。夢を見ているにちがいない。ヘリコプターの音が聞こえる。背中直前で音だけがぐるぐると回っている。風はない。確実に浅い夢であろう。曖昧にとぼけた口調で夢…とつぶやいた。途切れそうな意識のなかで、篤郎と名を呼ばれてびくっと目を開けた。澄んだ柔らかい女の声。きれいな声で自分の名を呼ばれるのは気持ちがいい。夢であろうと、現実であろうと。再び心地よく目を閉じた。

家に帰ると、玄関の前に黒と白のぶちの子猫がいた。片目が潰れたように瞼が下がっている。座ると後ろ足が背骨より妙に飛び出ていた。骨と皮といった様子だ。目だけ大きい。耳の先には黒い泥のようなものがこびりついている。鼻も汚れている。小さな口元でにやあと鳴いた。母のせいで媚びる習慣が身につけてしまったのか。寄ってくる。潰れかけた目を見ているだけで虫酸が走る。近くに立てかけてあったプラスチックのバットを取り上げた。バットを振る格好をした。遠くにいくよう促した。子猫は離れる様子はない。近づけるバットに体を擦りつけようとさえしている。腹が立ってきた。バットに重く力を置いて、子猫の腹のあたりを突ついた。にやあと甘えた声を出す。猫嫌いという私の存在など無視し、バットに愛着さえ感じているかに見える。足を踏み鳴らした。石を足元に投げつけたが、びくともしない。大きく息を吸い、バットに力を込めた。思いきり振った。一メートルほど子猫が宙を飛んだ。倒れるように着地した猫は、もぞもぞと手足を動かしている。バットを捨て、猫に近づいた。やりすぎたか。小さく嘔吐した猫は、私には目もくれずにふらついて裏のほうに向かっていった。

つまらない気分で家に入った。小さい頃から変わりばえしない家。どこが汚く、きれいなかわからない。埃も相当積もっているはずだ。目にしても、ほうきで掃こうという気も起こらない。綿埃を足で踏み潰した。先ほど流れ出した排水を踏んでしまったので、靴下を替えようとタンスの引出しを開けた。紺、黒、白、柄物と配置されている。靴下の縁に小さく赤い糸でA T U R O Uと縫い込まれている。どの靴下にも赤い糸で同じように。ブランドもののようにさえ見える。母がしたものだった。小さい頃から靴下に名前をローマ字で縫う習慣があった。一種の趣味であったかもしれない。恥ずかしいからやめてほしいと頼んでも、母は一向にやめようとはしなかった。誰のものかわかるようにとのことだ。わからないように靴下を二度ほど折り返していたが、目ざといクラスメイトにはマザコンと言われてからかわれた。それを母に告げたことはない。紺色の靴下を手に取り、座り込んだ。子供が不器用に穿こうとするように、爪の伸びた足先にゆっくりと靴下を引っかけた。丁寧に布を引き上げ、縁を二度ほど折り返した。自分の名は見えない。

冷蔵庫を開けた。何を食おうか。期限切れの牛乳。食パン。ビール。ウィンナー。プリン。アジの開き。四個の玉子。買い溜めたピザや麺の冷凍食品。置きっぱなしのタッパの中身は知らない。テーブル上の大きなカゴには、ふりかけやお茶漬の素、カロリーメイトや喉飴がたくさん置いてある。コンビニに行く気にはなれない。レンジで温めればどうにでもなる食べ物はいくらでもある。残りのご飯は釜に相当ある。ビールだって多少飲めば楽観的になれるだろう。カロリーメイトでも齧るか……。あれこれ考えているうちに、空腹感が消えていった。泡のようだ。飲み込んだと言ってもいいかもしれない。

畳の上に寝転んだ。ポケットから煙草とライターを取り出した。口にくわえ、空っぽの肺を満たしていく。もてあましていた時間と煙を、天井に向かって静かに吐いた。緩やかな空間が流れ、満ち足りない自分がある。二十八……そうだっけね。歳を思い出して我に返った気がした。ドラマに出てるなんとかって俳優も二十八だったっけ。歳にこだわる理由などないが、やけに気になる。この歳にして若いというのも変だというのに、その言葉が重要に思える。若いとか老け

て見えるか。自分は当然若いつもりでいる。意識してしまうことがバカバカしい。十年前なら、子供という言葉は使っても、若いという言葉を使ったりはしなかったろうに。

煙草をくゆらせ、遠い空を見上げた気分である。夏子の皮膚は自分のよりはるかに柔らかく、優しい。ふんわりとのぼっては消えていく煙に似ている。曖昧に現実から遠のく互いの皮膚の感覚が、心地よかったことを意識させる。胸や尻や滑るような肩に触れたい。脳を刺激するすべては、皮膚感なのだ。体を頑なにさせ、煙草を吸い続けた。

天井から埃がぶら下がっている。細い糸のような綿埃が、煙草の煙に反応して揺れている。朽ちているみたいだ。ハタキか何かで取ればいいのだが、起き上がる気になれない。落ちそうで落ちない埃を見続ける。女と寝たい。夏子でもそうでなくてもいい。女である誰か。頭の下で手を組み、横を向いて体を丸めた。

客から注文をとり、厨房に向かった。マッサージをしてもらったばかりだというのに、首のあたりがぼかに凝っている。ベテランの山崎さんに口頭で注文を伝えたとき、足元がぐらついた。目の前が真っ暗になった。気づいたらしゃがみこみ、緑色のタイルの床を見つめていた。両肩に誰かの手が乗っている。チーズのにおいがして、喉元が締めつけられる。左足がくじいたように痛い。とっさに目のあたりを手で拭いた。

「だいじょぶ？ 貧血じゃないの？ ねえ、だいじょうぶ？」

耳元で声が聞こえ、ええと軽く頷いた。再び目の前の色が薄くなった。

「休憩室にいきましょう」

声の主は山崎さんだとわかった。両肩を支えている。ふらつく足で立ち上がった。色が戻ってきた。厨房の横の細い通路を抜け、四畳ほどの休憩室に辿りついた。テレビとテーブルの間に座り込み、溜息をついた。九年間この仕事を続けているが、こんなことははじめてだった。

「無理しちゃだめよ。顔色が悪いじゃないの。ろくなもの食べてないんじゃないの？」

「そんなことないですよ。ちょっと疲れただけじゃないかな」

強い口調で答えた。内心自信がなかった。ただ、ヤワでない自分を示したかった。

「ちょっと休んでて」

そういうと、山崎さんは小走りで厨房のほうへ行ってしまった。

どうしたというのだ。この二週間ほどで、体がおかしくなっている。食べ物の関係だろうか。独りがそんなに重いのか。はっきりとした答えがないだけに、疑問だけが渦を巻いている。テーブルの上に置かれた手鏡を取って覗いた。特別顔色が悪いようには思えなかった。頬や唇の色も悪くはない。こうしていることでよくなったのかもしれない。

山崎さんが鍋を抱えて戻ってきた。

「作ってきたのよ。お粥だけど、いいかしら。あっさりしたものがいいと思ってね」

札を言って鍋を覗くと、溶けてしまいそうな粥が入っている。柔らかい湯気があがっている。

何年ぶりだろう、そんな感覚だ。れんげで粥を丁寧にすくう。人に作ってもらい、温かい懐かしいもの。口に入れるとすぐになくなってしまう。山崎さんがそこにいるのも意識させずに、うまいなど口をついて出た。

「そう、よかったわ。お粥、はじめてみたい顔してるわ」

粥というものをほとんど食べたことがなかった。風邪をひいたり、腹の具合を悪くしたことがなかったからだ。粥を見ても、お茶漬けと同じものとしか思えずに、興味をもった記憶がないのだ。ここにある粥は格別に思える。真ん中に乗った梅干は食欲を増す。すぐに平らげ、腹や心は満たされた。体調は少しも悪くない。

「やっぱり、腹が減ってただけだと思います。もうだいじょぶですよ」

山崎さんはにこりとした。

「家に来る？ 食事困っているんでしょ。どうせ息子は下宿してるし、誰もいないのよ。ここに通うのだって楽だし、ねえ、そうしなさいよ」

「いや、だいじょぶですよ。そんなに心配しないでください、ほんとに」

山崎さんは心配げな顔でいたが、大丈夫だと二度ほど告げると安心したようだった。

厨房に戻る山崎さんを見送り、しばらくの間休憩室にいた。窓から空を見上げた。明るく白い空だ。こんな高いところにいるのに、空さえ眺めたことがなかった。目を落とし、黒い壁の建物を見ていると、窓ガラスに自分の顔がはっきりと映った。色のない顔の輪郭を映し出している。目だけが強い黒さを増している。父はこんな顔をしていたのだろう。二歳のときに離婚したそう。当然、父の顔を知らない。写真もどこにあるか知らない。母は私の顔が自分にそっくりだと言い張った。あの男に似ていないんだから嬉しいのよとくやしそうに言った。母は私をよく抱きしめた。高校に入ってから気味が悪いほど抱きしめることがあった。嫌がっても離そうとしない。母親に反抗さえできない自分をはがゆく思いながら、ボールペンの先が壊れるほど壁に打ちつけたときもある。頬に搔きむしり、爪あとをつけたときもある。今になって理由を探ることができなかった。窓ガラスに映る自分を見ているうちに、抱きしめた母の手の感触が蘇った。嘘だろ。自分を疑った。繊細なんて言葉は似合わない。調子を崩して気弱になっているだけだ。昔を思い出す自分に腹が立ってきた。窓から離れ、鍋を持って部屋を出た。

家に帰ると、夏子が食事の仕度をしている。これで二度目だ。湯気や匂いで暖かい気分させる。何を食べようか考える必要がないという安堵感もある。反面、一種の緊張感を引きずっている。無意識のうちに誰もいないことに慣れてしまったのか。胸騒ぎがするのだ。台所に立つ夏子の後姿を意識しているのかもしれない。平たいクッションを並べ、体を横たえた。膝から下が痛んだ。指で押すと傷みが増す。軽く叩いた。

「だろうと思ったから、湿布持ってきてるのよ」

エプロン姿の夏子が数枚の湿布薬を手をしている。足に貼ってくれた。そばにこんな女がいる。ラッキーな男だな。将来を過ごすには申し分ない。でも、焦る気にはならない。何の誓約など



なくても夏子はわかって裏切りはしないだろう。そういう女だし、今の生活をまだ続けていたいのだ。

「今日は泊まってくんだろ」

なんとなく聞くと、ためらいがちにうんと返事をする。

二人で食事をしながら、職場でのささいな出来事を話した。夏子はおっとりとして頷いていたが、しばらくして二冊の雑誌を出した。求人情報誌だった。

「……ねえ、あっちゃん、仕事変えたほうがいいと思って。さっき、よく見てみたんだけど、結構あるのよ、仕事。今すぐってわけじゃないけど、早いほうがいいでしょ」

「なんだよ、突然……」

転職など考えたことがなかったので、気にせず食べ続けた。夏子はそのうちの二冊を広げた。

「だって、商業高校出たって前話してたよね。資格だって結構持つてるって。なのに、どうしてウェイターなんだろうって、前から思ってたの。足や腰を痛くしなくたって、事務の仕事だってあるんだし」

「バカにしてるのかよ、ウェイター。そのへんの事務員より給料いいはずだぞ」

高校を卒業する前から、今の職場で働いていた。小学生の頃から野球をやっていて、体力には自信があった。接客も好きだった。社員になるよう誘われたときも迷いはしなかった。でも、母も夏子と同様、事務の仕事勧めた。つい二カ月前にもそんなことを言われたばかりだった。

「そうじゃなくって、体のこと心配してるのよ」

「ただの職業病だよ。事務だって肩がこったり腰が痛くなったりするだろ」

「そうだけど、将来ずっと今の仕事続けるわけにはいかないでしょ」

五年後も十年後のことも考えたことがなかった。三十後半の男がウェイターなどやっている。品よくスタイルも崩れそうもないが、足腰がまいるだろう。その前に、店長がうまい具合配慮してくれて、事務でもやっているかもしれない。あれこれ想像して、急に食欲が失せた。一日先のことだって考えればきりが無い。

「続けられるさ」

夏子は黙っている。

仕事を変えるつもりはない。このまま十年先もこの仕事を続けている。確信した。何も変わらない。母が生き返るわけもない。これ以上に失うものなどないのだ。仕事ひとつから分散してしまう不安。数えきれないほどの材料を掲げたくはない。突然母親みたいなことを言う夏子をうらめしく思った。

それきり夏子は食べ終わるまで喋らなかつた。伏し目がちの睫毛は長く、眉は柔らかく弧を描いている。首筋にかかる黒髪が、規則正しく外に向かってはねている。化粧をしても、元来の肌の白さが見てとれる。シミかわからないが、ほくろが首筋にひとつある。こまやかな皮膚が透き通るように見える。それを確かめるために触れてもいいだろうか。

急に夏子は立ち上がり、冷蔵庫を開けた。髪が顔の半分を覆った。

「たくわんの漬物買っておいたのよ、忘れてたわ」

仕事の話はなかつたように声が高い。たくわんのせいで、夏子の柔らかい横顔が一瞬にして消えていった。自分もたくわんを齧った。味が感じられない。歯ごたえと喉ごしがよかった。

「ね、さっき、玄関の横にね、猫がいたわよ。子猫じゃないけど、それよりちょっと大きい感じの……。人に慣れてる感じだったけど、あっちゃんの猫じゃないでしょ？」

「まさか。猫は嫌いだって知ってるだろ。おふくろが猫に餌やってたみたいなんだよ、そのせいなんだ。見かけたら追っ払っておいてくれよ。猫はごめんだね」

「猫なんてかわいいのに」

ふふと笑った。

母のことを口に出すだけで、喉元が締めつけられる気分だ。体が凍りつく。フラッシュバックするせいだろう。鼻の高い一重瞼の母が私に微笑みかけている。とどまることなく気持ちを傾け続けてくれていた母。厚い手で背中を抱きしめた感触を、連続して思い出したことを嫌悪した。そして猫。待っているにちがいない猫が存在することが憎かった。

寝つきが悪い。昼間立ち通しで神経も使う。眠れて当然だと思っていたが、意識がはっきりとしている。外でがさごそと物音がする。風のせいだろう。今日したことを思い出せない。五日連続接客をしているのだから、当たり前かもしれない。客の顔もマネキンを見ているみたいで興味もわからない。退屈な日を繰り返し、日々の緩さに体の力が抜けた。家のすぐ横で、ガタンと物が落ちる音がする。寝返りをうった。ガタンともう一度音がする。同時ににゃあという鳴き声がある。低音のしぶとい鳴き声もする。遠くで微かに天に向かうような声も聞こえてくる。壁を背にし、体を丸めた。何匹いるのだろうか。母が野良猫に餌など与えなければ、群がることなどなかっただろうに。だいたい、あの頃以上に猫が増えた感じがする。物欲しげに鳴く声が盛んなせいだろうか。

幼い頃から猫が多かったが、これほどではなかった。毛が汚れて飴のように固まっている。汚物を垂れ流しているような尻。片目が潰れている。骨がところどころ突き出、何ひとつ豊かな部分がない。学校帰りに見かけても、憐れみを感じたことがない。人間を恨んでいるかのような目が怖く、気味が悪い。小汚く、ずるい鳴き声を嫌悪した。見かけると石を投げた。触れたら何か悪いものに汚染されそうな気がした。母はいつから猫に餌をやっていたのだろうか。私が学校に行っている間に、隠れてやっていたのだろうか。キャットフード代もばかにはならないのだから、私が成長してからのことだろうか。母と猫との交流が記憶にないのだ。

家の背後には低い山がある。丘に近いが、茂る木々が深く、はた目では山に見える。小さい頃はよく遊びにいったものだが、だらしのない猫の糞があつたり、菓子の袋が散乱していたりときれいなものではなかった。周辺では猫が繁殖し、子猫の死骸を見かけたこともある。ハイキングコースのようなものあつても、わざわざ歩きに来る者はいない。私も虫を採りに出かけたくらいで、母と改まって山に入った記憶はなかった。遠くの景色は悪くはない。足元が汚いのだ。中学生や高校生が溜まることもあつた。夜中、騒ぎまわつたり、煙草を吸つたりといった具合だ。発情した猫が鳴きまわるのが耳について、眠れないこともある。増え続ける猫たちをかわいそうだと餌をやる者は多い。猫を捨てていく者さえいる。保健所も数匹の猫を引き取っただけだ。増え続け、病気は伝染し、ものを食い、糞をする。永遠に続く猫の営みを憎み続けた。山は猫の棲家そのものなのだ……。

耳を手でふさいだ。猫の声など聞きたくはないのだ。『アクア』にいるときのような爽やかな眠りが欲しい。手の隙間から低い鳴き声が聞こえてくる。恨んでいるような、空腹にいらついているような声。溜息がもれる。突然、猫の喧嘩が始まった。絡まり、爪で引っ掻きあっているようだ。糸が切れたように鳴き声が叫びに変わる。路上を走るバイクの爆音とともに空き缶の放られた音がする。二匹の猫にもう一匹加わる。外に出て水でも撒いてやればいいのかもかもしれないが、億劫だ。体をさらに丸めた。空腹なのか。発情しているのか。猫たちの喧嘩はやみそうにない。繰り返される鳴き声が、雑音のようになる。耳に慣れたのか、猫であることを意識しなくなる。耳を押さえながら、歌を口ずさむ。自分でも何の歌か思い出せない。童謡らしい静かな歌が口をついて出るのだ。不思議と眠りを誘う。

あした あの子と 遊ぼう  
車に乗って 見つめた  
蝶が浮かんでいる  
たくさん  
あの子と一緒に

特別な感情などない。言葉の意味など追うつもりもない。口ずさむだけで、目頭が熱くなるのだ。なぜだろう。力だけが抜けていく。意識が遠のくなか、心の奥で言葉だけが繰り返し流れていった。

晴れた昼すぎに、叔父がやってきた。叔父は母の弟だ。埃の溜まった床も、食卓に置きっぱなしの皿や菓子の袋も気になったが、一枚の座布団だけを慌てて用意した。叔父は家の中を軽く見まわし、明るい声で言った。

「一人暮しってのはどうだい。……もう慣れたかな」

テーブルの前に置いた座布団に、ためらいもせずに座った。私はお茶を入れるために台所に立ち、ええとだけ返事をした。ポットの電気を抜いていたために、急いでやかんを火にかけた。せんべいも品のいい菓子もない。あるのは食べかけのポテトチップスとポッキーだけだ。冷蔵庫を開けていると、

「何もいないからね」

と優しい声が聞こえた。戸棚の奥に仕舞ってある湯のみ茶碗を探した。高級そうな焼き物の茶碗と茶たくのセットである。今まで誰にも使われたことのないもののようなのだ。

「もっと早く来ようと思ってたんだけど、娘が留学したいなんて言い出したもんだから、ちょっとごたごたしててね。……悪かったね、篤郎君」

沸いた湯を急須に入れ、茶碗に丁寧に注いだ。叔父の前にお茶を出し、自分は薄いクッションに腰をおろした。叔父と向い合うと、妙に落ち着かない。今まで顔を合わせたことがほとんどなかったせいだろうか。同じ市内に住んでいながら、私と叔父との関係は他人のようであったのだ。母が自分の弟と親しげにしていたという記憶もあまりない。母の死で初めて言葉を交わした気がする。

「一人で大丈夫かね。食事に困ったりしてるんじゃないのか。ちょっと痩せたように見えるけど、……大変なことだったしね」

叔父は白くなりかけた頭を掻きながら、風呂敷包みをテーブルの上に置いた。

「家内がね、作ったんでね、食べてくださいよ。篤郎君のために腕をふるったらしいから」

包みを開くと、四角い大きな重箱が三段も並んでいた。叔父は小さく微笑むと、お茶を音をたてて啜った。私はありがとうございますと頭を下げ、そのままじっとしていた。

「煮物もあるし、漬物や揚げ物もある。コロツケやハンバーグもね。そのへんで買ったのより

はまあいいよ。レンジで温めればすぐ食べられるから」

「すみません。……夕飯にいただきますから。助かりました。いつも適当に過ごしちゃって、ろくなもの食べてないんですよ」

叔父は無理に笑っているようで頬が引きつっている。

「遠慮しないで。私も家内も篤郎君のこと心配してるんだ。一人でどうしてるのかと思うと、気が気じゃないだよ。芽衣子は一人息子を残して逝ってしまったんだ……。篤郎君、きみ、一人になったんだから……」

そう言うと、突然叔父は顔をくしゃくしゃにした。嗚咽がもれた。震える声で、まったく……と呟いた。私は得体の知れない不安に飲み込まれそうになりながら、茫然と叔父を見つめていた。

「できるかぎりのことはするからね。家内も食事のほうは心配いらんって言ってるから」

叔父はハンカチで額を拭った。平気ですからと言うと、何度も頷いた。

「……そう、花を持ってきたから、芽衣子のお墓にいきたいんだがね」

立ち上がって鼻を吸ると、強い口調でしっかりしないとねと声をかけた。

母の墓は家から歩いて十五分くらいの路地裏にある。古いパン屋の隣でひっそりとしている。叔父は歩くのが遅く、薄いピンク色の花卉に触れていた。

「芽衣子はね、スイートピーが好きだったんだ。小さい頃から変わらなかったね、私からいうとちょっと少女趣味的なところがあつたと思うよ。直感でかわいいものが好きでね、だから、篤郎君のこともかわいがつていたと思うよ……」

あの夜、私は夏子と過ごしていた。母は華道教室の交流会とかで市内の福祉施設に一泊することになっていたのだ。前から夏子と約束し、八時頃からドライブに出かけ、家に入れた。母は夏子の存在を知らなかった。母は恋人の存在を嫌がるだろうし、私の行動に疑いをかけるだろうと思ったからだ。しばらくの間、秘密であることを楽しみたい気分もあつた。いい歳をして、私は仕事熱心な従順な息子のフリをしていたのだ。

家で買ってきたアルコールを飲み、開放的な気分浸っていた。灯りのない風呂に二人で入った。石鹸で滑らかな皮膚の感触が蘇る。一瞬一瞬が心地よく、時間も長く感じられた。アルコールがまわり、現実的な感覚が麻痺し、夏子が女にしか見えなくなっていた。防水用のラジカセで洋楽のロックを響かせ、当然のごとく交わつた。風呂を出て、ベッドに転がりこんだ。風呂からはロックが鳴り響いていた。電話の音に気づいたのは、夏子がトイレに立ったときだった。病院からだつた。母が交通事故に遭つたので、すぐに来てほしいとのことだつた。急いで向かつたときには、もう母の息はなかつた。看護婦に、何度も電話したんですがお留守のようで……としつこいほど言われた。あと十五分早ければとも言われた。運ばれてきたときにはもう意識がなかつたんです、という話を医師から聞いたときは、安堵した。自分を慰めたくて、冷たい母の頬や掌を何度となく撫でた。

華道教室の仲間の話によると、母は十時過ぎにクリーニング店に向かつたらしい。店はもう閉まつてるからととめたのだそうだが、母は息子のスラックスとベストを取りにいくのを忘れてと言つて聞かなかつたそうだ。自転車を無灯で走らせていたらしく、前方のコンクリートの塀にぶつかり、その拍子に転んで頭を強く打つたということだつた。運が悪く、残念だと医師が丁重

に頭を下げたのが印象的だ。

叔父と歩きながら、微かに頭が痛んだ。目の奥の深い部分が重く痛むのだ。両目の間を指でつまみ、軽く息をついた。母の死顔がふと目に浮かんだ。陶器のように白い。話しかけてくれそうだが、乾いた口は閉じたままだ。篤郎と呼びかけてくれるのではないかと期待すらしながら、母の顔を長く見つめていた。静寂だった。世界の時間がとまったように、静かで無であった。楽しい瞬間も、苦痛も、すべてが終わってしまうことが怖い。鼓動が終わり、言葉は発せられない。目を開けてはくれない。私は現実感覚を失い、母の喪失を見つめた。それは今も変わることはない。

「あれからお墓参りはしてないのかい？」

急に叔父は言った。二カ月もたつというのに、一度も行っていない。

「仕事が忙しくて、なかなか……」

「そうだろうなあ。忙しいよなあ」

叔父は納得したようだった。墓参りに出かける気分にならなかったのだ。もういない母にどう手を合わせようと、無駄な気さえしていたのだ。

叔父と歩幅を合わせていると、目の奥が強烈に痛み出した。咄嗟に目を固く瞑り、座り込んだ。軽く咳き込んだ。

「どうしたんだね？」

優しい声が耳に届き、肩に手が触れる。疲れかもしれない。毎日細かなメニュー表を見ているのだ。職場でも度々軽い痛みに襲われることがあったが、こんなことは初めてであった。

「……風邪気味なんです。たいしたことないですから」

「そうか。とにかく、家で寝てたほうがいいから」

叔父は私の両肩を支え、反対方向に足を向けた。立ち上がったときにはほとんど痛みは感じられなかったが、病人のように歩いた。叔父は肩を軽く叩いた。その拍子にスイートピーの花束が道路に落ちていった。あつと言うと、気にしないでいいよと言う。叔父はスイートピーを脇に挟み、

「後でちゃんとお墓参りに行ってくるからね」

と言いながら、私の肩を支えてくれた。

クズを採りにいきたいと言う。『アクア』に来る患者が疲労や食欲不振で困っているのだと言う。薬草の図鑑で調べたのだそうだ。夏子は、曖昧に裏山に行こうと言い出した。薬草の粉末ならドラッグストアにでも売っているだろうと言ったが、加工品はダメなのと言い張った。気乗りはしない。汚いという意識しかない。猫がいることが気に食わないのだ。感じの悪い猫がたくさんいるだろう。物欲しそうに寄ってくるだろう。呪うような鳴き声を発するだろう。反対したが、夏子は聞かなかった。

「かわいいとか、かわいそうとか、そういう感情はないの？」

いつになく剥きになっている。

「時間があるときは餌だってあげようと思ってるのよ」

嫌悪という文字しか浮かばない。疑問を持ったとしても、すぐに気泡のように消えてしまう。これからのことを考えると、多少の我慢も必要なのではないか。夏子に従うことに決めた。

二人で背後にある山へ入った。案の定、猫がうろついている。気持ちがいいわね、と夏子は言う。低い木が茂っている。一応、朽ち果てた遊歩道がある。鳥の声が遠くで小さく聞こえてくる。夏子が見ていないところで、唾を吐いた。倒れた木の上で黒っぽい猫が黄色い目で見ている。足元を見ると、糞が転がっている。夏子は気づいていないようだ。

「患者さんね、おばあちゃんなんだけど、家族のことで悩んでるみたいなの。マッサージしながら話聞いててね、少しでも楽になってほしいと思ったの。でも、私ができることなんてたいしたことじゃないのよ、なんたって民間療法じゃない、これって」

背の伸びた雑草の下で、猫が死んでいるのが見えた。目をそらしながら、

「死んでるよ、猫がさ。子猫みたいだけど」

と言うと、夏子は顔をしかめ、近づいた。

「かわいそう。誰か飼えばこんなことにならないのに。私だったら飼ってあげる。でも母がアレルギーだから……。ね、埋めてあげようよ」

死骸のそばにしゃがみ込んだ。素手で冷たくなった猫を抱き上げる。私はズボンのポケットに両手を突っ込んだ。猫の目が飛び出、白い毛が髄を絡めたように固まっている。ところどころ毛が抜け、皮膚が黒ずんでいる。足が棒のようにまっすぐ伸びている。鼻の頭だけほのかなピンク色をしている。古くなった人形を抱き上げたみたいだ。夏子はかわいそうと言い、頭を撫でた。私は突っ立ったまま、顔をそむけた。

「ちゃんと埋めてあげなきゃ」

夏子は死骸を抱え、柔らかそうな土を探した。ちょうど草の生えていない踊り場に似たところを見つけ、走っていった。ズボンからくしゃくしゃのハンカチを取り出し、口に当てた。飛び出た目がこの世を静止し、宙を睨んでいるようで虫酸が走った。

「あっちゃん、手伝ってよ」

しぶしぶ近づき、猫から目をそらして土を木の棒で突つき出した。思ったより土は柔らかかった。

「ここ、一応山なんだぜ。わざわざ埋めてやらなくたっていいと思わないか」

夏子はそんなことできないと言い、ふてくされた顔をして遠くを指さした。

「あそこ、池があるのよ。……沼かもしれないけど。湿気があって無残な姿になっちゃうでしょ。だったら、埋めてあげたほうがいいじゃない」

たしかに池のようなものが見える。今まで知らなかった。木々が茂ってわからなくなっていたのだ。とてもきれいな池ではない。濁った水が溜まっているだけだ。私と夏子は黙って掘り続けた。ある程度穴ができると、夏子はバッグからティッシュを取り出した。穴の底に敷きつめ、その上に猫を丁寧に置く。合掌し、惜しそうに土を少しずつかぶせていく。

始末を夏子に任せ、私は木々の合間から見える池を見ていた。魚でもいるだろうか。泥水のようなうだ。いるわけがない。せいぜいドジョウくらいだろう。山も池も朽ちたようで不気味だ。誰も近寄らないだろう。だいいち、道がない。草が潰れて小道ができている様子もないのだ。木々の奥でひっそりとしている。澄んだ水なら神秘的にさえ見えるだろうが、ここではあり得ないことだ。夏子は溜息をもらし、かわいそうと呟いている。

「ね、花なんて咲いてないのかしら。花を挿してあげたいのよ」

あたりを見まわしても花らしいものはない。

「このへんにはないみたいだな、奥にいけばあるよ。」

仕方なさそうに夏子は歩き出した。私も向かおうとして、足をとめた。池のほうで何かが見えたのだ。目を凝らした。鼓動がし、鳥肌がたった。池で溺れている女がいる。髪が長く、口を大きく開け、手をばたつかせている。私のほうを見ているのだ。よく見ると、母である。たしかに母なのだ。嘘だろ……。全身から冷や汗が流れ落ちる。目を瞑り、一呼吸してから目を開ける。母は私を見ている。確かに見ているのだ。何か言っている。

「ああつうろお」

浮き沈みを繰り返す体と声が叫んでいるようだ。何度も私の名を呼んでいる。手足が震えた。……幻だ、絶対に。自分に言い聞かせ、夏子の名を呼んだ。

「帰るよ、俺。気分が悪くなったんだ」

池には目もくれずに道を下り始めた。背後で夏子が走ってくる。早足である私に向かって言った。

「ほんとに調子悪いんじゃない？ ねえ、心配だよ」

歩幅を合わせ、私の手を握った。

仕事を午後の三時できりあげ、家に戻った。昨日は一睡もしていない。タウンページを開いた。近くで行きやすそうなクリニックを探した。この場合、精神科に行くべきなのだろうが、抵抗がある。神経科でもいいと考えながら、探す。ほとんどのクリニックは精神科と神経科がセットとなっている。他にも心療内科という科もあるのだ。広告にはカウンセリングもしているところもあるらしい。こういうクリニックに足を運ぶというのは、変質的なのだろうか。過るのは、自



分の頭が異常をきたしたということだ。内科や外科ではない。やましい気分さえなるが、どうしてもあの幻覚を見たことを客観的に判断してもらわねばならない。こういう場合、大学病院にでも行けばいいのだろうか。専門の医師が揃っているかもしれない。タウンページを見ながら、近くに大学病院がないことに気づいた。窓から見える小鳥の群集をぼんやりと眺め、溜息をついて立ち上がった。

保険証を持ち、車に乗った。母の苦渋に満ちた顔が目浮かぶ。ハンドルに力を入れ、タウンページで見つけた車で二十分ほどであろう美草クリニックに向かった。懇切な安心した診察という言葉が目をついた。

中に入ると、白い壁の落ち着いたクリニックだった。オルゴールの音が流れている。受付の中年の女性がこれに記入してくださいと、アンケート用紙のようなものを渡した。症状のところに何と書けばいいのか迷う。『幻覚』そう書けばいいのだろうか。医師が何て顔をするだろうと思うと、ためらう。さんざん考えたうえ、『ストレスが溜まっている』とだけ書いた。

待合室には四人しかいなかった。若い女性と子連れの主婦らしい人と、太りぎみの中年の男性、杖をついた白髪頭の男性。一人は雑誌を読んでいたが、あとの三人は下を向いて黙って座っている。中年の男性の隣に座り、何を話せばいいのか考えていた。何を質問されるかも気にかかる。医師は異常者として患者を見るのだろうか。それとも……。まず、始めにアンケート用紙に書いたストレスについて尋ねるだろう。説明しづらい。体調を崩すことが最近多いが、幻覚について答えるのは重い。池で母が溺れている姿を見たと言うのか。歪んだ顔で私の名を読んでいたと言うのか。おかしい目で見られるに決まっている。病院に入れと言うかもしれない……。

あれこれ考えているうちに、自分の名が呼ばれた。胸が高鳴るなか診察室に入った。初老の白衣を着た落ち着いた雰囲気医師が机についている。茫然としていると、どうぞと座るよう促した。

「どうしました？ ストレスということですが……」

静かな口調だ。口ごもりながら、ええと小さく頷いた。

「夜は眠れますか？ 食事が入らないとか。ストレスで不調を訴える人が多いですからね」

夜も眠れるし、食欲もある。一瞬、どうしてここに来たのかわからなくなる。

「目覚めはよろしいですか？」

「ええ。あのう……。最近、めまいや頭痛がするんです」

咄嗟に思い出したように答えた。職場でもそういうことがあった。やはりストレスなのだ。幻覚もそのせいかもしれない。勝手に原因とし、納得するために自分に言い聞かせた。

「どういうわけでここに来たんですか？ ストレスを感じてるようには見えませんがね。内科で異常がなかったとか？」

おかしいことを聞く医師だ。ここで幻覚という言葉を出してもいいだろうか。

「いえ。そうではないんですが、最近仕事が忙しくて、疲れを感じているものですから」

医師は頷いて、カルテに何やら書き込んでいる。黙っているうちに、幻覚のことも言おうかどうか考えた。この医師の雰囲気から、何かよからぬことを連想しそうな気さえする。ただ、静かには受けとめてくれそうだ。

「あの……。ええと、この前……。いるはずのない人を見たんです」

そう言うと、医師は表情を変えずに私の顔を見た。

「母なんですが……」

えっという顔をした。

「どういう感じにですか？」

「……一瞬、幻のように母の姿が見えたんです」

わざと柔らかく言った。美しい幻想のようである。

「今まででもそういうことがありましたか？」

「いいえ」

「錯覚という感じじゃないですかね……」

医師はアンケート用紙を持ち上げ、しばらくの間見ていた。うーんと唸るような声をあげた。胸の鼓動が速くなった。靈感の強い人間と思われたかもしれない。

「お母さんは亡くなられてるんですね。ええ、それであなたは今、一人で暮らしてるわけですよね。ところで、お父さんのほうはどうされたんですか？」

淡々とした喋りだ。

「父は私が二歳のときに離婚したんです。会ったこともありませんし、とくに気にかけるということもなくて、元々存在しなかったようで、淋しいとかそういう感情をもったことはありません」

医師はそうと言い、気にとめる様子はなかった。

「お母さんの死が相当ショックだったんでしょう。もともと感受性が強いほうかと思うんですが、一時的なもので、お母さんの死でさらに鋭くなってしまったんでしょう」

感受性が強いとは意外な答えだった。今までそんなことを意識したことがない。医師の答えに納得できなかったが、黙っていた。

「軽い安定剤を出しておきましょう。食後一日三回飲んでください。それから、一度内科を受診なさってください。めまいや頭痛のことも気になりますからね」

医師はカルテに素早く書き込み、受付の女性を呼んだ。こんな早くに診察が終わるとは思わなかった。私は礼を言い、診察室を後にした。これで楽になれる。医師の言うことは最もな気がした。薬を飲んで鋭くなった神経を休ませればいいのだ。今までの不安が嘘のようになくなった。穏やかな気分だった。

休憩室でお茶を飲んでいると、山崎さんが飲みに行こうと言い出した。今までそんなことを言い出したこともないのだが、積極的に行こうと言うのだ。私に微笑みかけさえしている。仲間も珍しいねなどと言いながら、乗り気である。私も飲みに行きたい気分である。薬を飲むようになってから、夜もぐっすりと眠れる。猫の鳴き声もそう気にはならなくなった。体の力が抜けた気がする。薬を飲むようになり、以前余程体が緊張していたのだと改めて思う。仲間が仕事に戻っていくなか、山崎さんは私に言い残した。

「なんか、最近元気になったみたいね。顔色もいいみたいだし」

複雑な気分ではにかんだ。実際元気になっているのだが、薬を飲んでいるという理由もある。まあいい。誰もいない休憩室の窓から、下界を覗いた。自分は地上よりも高く、澄んだ場所にいるのだ。客さえも気高い。冴えた空を見ているうちに、自分の悩みなどどれほど小さなものかと思う。亡くなった母も本当の幻で、切り刻まれた神経のせいなのだ。このまま仕事を続け、夏子と一緒になればいい。いつまでも一人でいるわけにはいかないのだ。現実的な事柄をひとつひとつ並べ、浅い呼吸をした。

客の入らない仕事場で、仲間はずきばきとセッティングしている。テーブルを拭き、椅子を揃える。私は小ビンに塩や胡椒を満たし始めた。

「今日、中原の誕生日だってね。誰か祝ってくれる人いるの？」

仲間の一人が皮肉を込めるように大声で言う。ああ、いるらしいぜ、と厨房の田中が言う。アルバイトの女の子は無表情で食器を拭いている。

「女かな」

「さあな。でも、あいつ、今日、ディズニーランド行くんだって言ってたぜ。男同士で行くかな」

「女だな」

「……だな。それ意外考えられないな。でも、もしかして、ディズニーのマニアだったりしてな」

「今度、問いつめてやろうぜ。中原とつきあう女の顔も見てみたいしな」

「明日、皆で聞いてみようか」

笑いが響くなか、山崎さんが肩を叩いた。

「あなただっていい人できるわよ、料理だって作ってくれる人がでてくるから安心しなさいよ、まだ若いんだから」

私はええと答え、はにかんだ。

「近いうちに飲みに行くわよね、パーッとね」

山崎さんはそう囁くと、厨房に戻っていった。

それ以来、声を潜めたきり、誰も話をする様子はなかった。

家に帰ると、玄関に大きな風呂敷包みが置いてある。すぐに叔父からのだとわかった。重箱には以前と同じように、煮物や揚げ物や漬物などがきれいに入っている。女らしい字で、『篤郎くんへ たいしたのものも作れませんが、どうぞ召し上がってください』と書かれたメモが入っている。レンジで温めるものなど、作り方さえ細かに書いた紙も入っている。台所のテーブルに置き、そのままにし、居間に寝転がった。目の前に転がっている洗濯バサミを手に握った。テレビもラジオもかけずに、目を瞑る。体が柔らかくなった気がする。肩の力も、足の痛みもたいして気にならない。なだらかに眠りが襲ってきた。

スイートピーを持ち、母の墓に向かった。優しいスイートピーの色合いや茎そのものが折れて

しまいそうで、両手で支えた。叔父が言ったように少女趣味的だ。弱くささやかに咲いているようだ。一本だけでは儂く物悲しい。十本ほど買った。それでも儂いのだ。母は弱く愛らしいものが好きだったにちがいない。猫にたいしてもそうだ。私を見ていないところで、瀕死の猫や空腹の猫を助けていたにちがいない。今まで母をいたわり、優しい言葉をかけてあげたことがあっただろうか。

母が亡くなった夜も、夏子と過ごすだけに時を刻んだことを後悔さえする。偶然に過ぎないにしても、冷たい時間を過ごしてきたようで胸が痛むのだ。あの幻も、私を大事に思う母の姿にちがいないのだ。

叔父があげたスイートピーがもう枯れている。新しく水をくわえ、花をあげた。母の墓は立派だった。新しいということもあるが、堂々として見えるのだ。手を合わせた。軽い風が吹き始める。頭を下げ、何を祈ろうか考えているうちに、目を開けてしまった。

「めずらしいですね、若いのに」

後ろから男の声がした。犬を連れた人だった。愛想よく微笑みかけている。

「よくここを散歩するんですけどね、このお墓はいつもひっそりとしているもんだから」

そうですねと言うと、男は続けて言った。

「あんまり若い人が来るってこともないし、きれいなところじゃないでしょ。いやあ、なんか感心しちゃって。声なんてかけちゃって悪いね」

犬が先へと急ぐので、会釈をして走るように行ってしまった。確かにこの墓はあまりきれいではない。雑草も生えているし、墓石も黒ずんだうえに苔が生えているのだ。そのせいか、なおさら母の墓は際立って見える。石も白く、他の墓より大きい。この下には母が眠っている。自分より遥かに小さくなり、地上に母の存在はない。残酷なことだ。幻覚は受け入れない自分が起こしたことに決まっている。もう一度手を合わせ、認めようと念じた。

いつもより光が眩しく感じた。スイートピーの花弁や茎もたつぷりと水分を含んでいる。晴れた気分になり、苔の生えたコンクリートの階段に足を向けた。

\*

休日だという夏子と夕食を終え、クイズ番組を見ている。夏子はコンビニで買ってきたファッション雑誌に夢中だ。雑誌に載っている女の格好を真似するわけでもないのに、  
「かわいい、こういうの、私にも似合うかな」

などと言ってくる。

「似合うかもしれない」

曖昧に答えてしまう。夏子はふてくされもせず、ページを次々と捲っている。

仕事の帰りに『アクア』に寄り、マッサージをしてもらったせいか、体が軽い。いつもより数倍軽いのだ。クイズの出演者の動作がぎこちなかったので、笑った。夏子はテレビも見していないのに、クスツと笑う。平凡だななどと思いながら、煙草に火をつける。幸せかもしれない。母を失った代わりに、こうして夏子がいるのだ。灰皿を差し出してくれる。

「似合うと思うよ」

突然言ったので、夏子は顔をあげる。雑誌のページには一面に女優の顔がアップで映っている。

「何が？」

「……べつに」

腑に落ちない顔をして、夏子は再び雑誌を眺めている。テレビの画面のなかでは笑いが絶えないが、どうでもいいことのように思える。煙草の方が確実にうまいのだ。母は煙草を嫌っていた。禁煙家で、とくに臭いを嫌がった。私は家で煙草が吸えなかった。外で吸う。帰ると、服から漂う臭いに必ず反応した。この臭いは健康を害すると言うのだ。服を叩く母の姿が目映る。故人は懐かしい。何もかも許したい気がする。靴下に名前を欠かさず縫い続け、クリーニング店に制服を取りに行ってくれた母に感謝せねばならない。今なら、ありがとうと言うことが出来るだろう。不可能なことにたいし、想いが募っていくのを感じる。

「お風呂に入ってくる……」

夏子は雑誌を置き、部屋を出ていった。

煙草が部屋中に充満していく。チャンネルを変える。テレビからヒーリングミュージックが流れてくる。知らない遠い国の風景である。浅黒い肌の青年が小さな船に乗り、槍のようなもので魚を採っている。海は白に近い。空は青い。いつかはあの青年もいなくなり、海だけは残る。空も変わらない。胸の奥が軽く痛んだ。感傷というものだろうか。母の死は自然死である。繰り返す営みのなかで、自分もまた生きているわけだ。妙な気分だ。郷愁のようだ。すべての人間に感謝したいくらいだ。まさか薬のせいではあるまい。

濡れた髪が夏子がバスタオルを巻いて出てきた。

「あいたよ」

テレビを消し、気持ちを切り替えた。濡れた長い髪が艶っぽい。洗面台に向かわずにシャツを脱いだ。夏子はドライヤーで髪を軽く乾かし、布団に転がった。

猫の鳴き声したが、気にならない。夏子の滑らかな皮膚が好きだ。何度となく吸いついた。首筋。胸。肩のあたりもたまらなく好きだ。胸の皮膚は薄く、弾力がある。湿っぽい布団の中が

、瞬時にして蒸してくる。脇から汗が流れる。気が遠くなる感覚を何度となく味わう。このまま終わってしまわないか。夏子に囁きたいが、言葉が出てこない。

夏子は半分濡れたような髪を振り乱している。目を閉じている。落ちていない口紅が唇の輪郭をなぞっている。頬が赤らんでいる。

「……あっちゃん、調子よくなった……の」

うわずった声で言う。ああと溜息混じりで答える。体が浮くような感覚がした。夏子は私の上で体を半分起こしている。下半身だけがじりじりと熱くなってくる。夏子の体が上下に揺れる。私は目を瞑り、感覚だけを味わっている。吐息がもれる。握りあった手が汗で滑る。

「……ねえ。……好きだったの、ず……と前から」

「ああ。……俺もだよ」

「……愛してるのよ」

「……ああ。俺もだ」

夢見心地で答える。夏子はほんとに？と聞き返す。ほんとだよと甘えた声で言う。先ほど見たテレビの白い海をイメージする。頭の中もクリアになっていく。

「ほんとに？」

声が強くなった。夏子の声と違う。咄嗟に目が開いた。顔が自分に迫っている。髪は乱れ、顔の半分が覆われている。呼吸がとまりそうだ。ほんとだよともう一度言う。夏子の片目が見える。鋭い。頬がこけている。顔が青白い。唇が白く紫がかっている。口元に皺が寄っている。私の目を凝視している。そらそうとした。金縛りにあったようで動けない。喉が締めつけられる気分だ。

「本……当……に？」

低い声が耳に響く。頭を打たれた気分だ。普通ではない。夏子を突き飛ばした。床の上に全裸の夏子は投げ出された。

「何するのよ、どうして、何するのよお。どうしたっていうのよお」

悲鳴のように言うと、唇を噛んで睨みつけた。私の唇は震え、動けなかった。上半身を起こして剥きだしにしたまま、夏子を見つめた。歯ががくがくする。

「最低」

バスタオルを乱暴に取り、洗面台の方へ行ってしまった。

一体誰の声だったのだ。鼓動がひどい速さで胸を打っている。死んでしまいたい。耳を塞ぎ、体を折り曲げた。頭を抱えた。全身に鳥肌がたった。口の中がからからだ。夏子の名を呼ぶ気力もない。弁解もできない。一体、どうしたというのだ……。あの声や顔は誰だったのか。やはり自分は病気ののだろうか。小さな声で夏子の名を呼んだ。返事はない。怖くなり、布団に潜った。眠りから醒めれば、すべてが夢だったとリセットできる気がした。夏子、と叫ぼうとした。声がかすれてうまく呼べない。

猫の声が小さく聞こえた。これも幻聴というのか。……胃のあたりがしくしく痛む。嘘であってほしい。

茫然としていた。夏子に弁解せねばならない。考えても思い浮かばない。夏子の顔が気味の悪い女の顔に見えたと言って信じてもらえるだろうか。それに、私は夏子を突き飛ばしたのだ。別の女に見えたとして、突き飛ばす理由などない。夏子が信じることはないだろう。軽蔑し、嫌われたと思うだろう。それも肉体自体を。最低な男だ。でも、なぜなのだ。受け入れられない女の顔を見た理由は。それほどに感受性が研ぎ澄まされたというのか。幻覚がひどくなっている。母であり、女であり、異様な姿で現れる。一度、大学病院の専門家に見てもらおう必要があるのかもしれない。

何気なく外に出た。くしゃくしゃに干した洗濯物の皺を伸ばした。青い空や緑の草木を見た。何も感じない。路上を走る車の騒音はうるさいだけだ。

猫がこちらを見ている。青年くらいの黒い縞模様の猫だ。目はレモンの形をしている。今まで見たなかでは一番きれいな猫だ。肉付きもよく、体を丸めている。近づいていった。動く様子はない。私の目を見ている。睨んでいるというほうが正しい。私も睨み返した。猫の直前で足をとめた。悔しさが込み上げてきた。何にたいしての悔しさかわからなかった。動く様子のない猫を蹴った。思いきり蹴飛ばした。猫の首あたりがぐにやりと曲がり、柔軟に宙に浮いた。着地した猫は抵抗もせずに、丸くまったままであった。

頭の神経がきれたようで、何も考えられない。庭先の雑草を掴み、山に足を向けた。なぜだかわからない。考えようとも、考えられないのである。体が無意識に向いてしまうのだ。とめようという感情が曖昧にわいてくるが、体がいうことを聞いてくれない。歩みがとまる気配はない。体が自分のものでない気がする。向かう先があつた山なんて、信じられないのだ。

山は薄暗かった。木漏れ日もどんよりとしたものだ。土は湿り気を含んでいる。ねばついた空気がそこらじゅうに広がっているみたいだ。

「俺は……なんでこんなところに来たんだ……」

鬱蒼とした木々を見ているうちに、ふいに口をついて出た。

数匹の猫がいる。子猫や年老いているらしい猫。子猫は甘えた声で鳴いている。

ふと何かを感じて後ろを見た。十匹以上の猫がいる。どの猫も私を見ている。何か言おうとしたが、声がでない。鳥肌だけがたつた。

足元がぐらつき、ひざまずいた。脳天が重い。両手を地面につき、嘔吐した。胃にあるものすべてを吐き出した。背筋が凍りついた。猫が寄ってきて、嘔吐物を舐め出したのだ。ミルクでも飲むような具合だ。どの猫も極上の餌を食べているように見える。目を瞑り、立ち上がろうとしたが、できない。気分が悪く、唾さえ飲み込めない。嘔吐物の臭いが鼻につく。吐き気が込み上げたが、もう胃の中は空っぽなのだ。

「ねえ、おいしいでしょ」

女の声がして顔をあげた。母だ。白い顔をして立っている。背が高く、しなやかな体つきをし

ている。生前とは違う。死を受けた者の顔をしている。私の体は固くなり、母の顔を見つめた。

「楽しい夜だったわ、……ありがと……篤郎」

不思議と怖いという感情はなかった。

母の背後に数え切れないほどの猫が群がっている。どれも小汚い。今にも死んでしまいそうな猫もいる。目の飛び出た子猫もいる。

「……どうして……お母さん」

か細い声が出る。

母は微かに笑みを浮かべている。目の前の猫は嘔吐物を食べ続けている。重いが、手足が動いた。母の足元に四つん這いのまま近づいた。訳を聞きたかった。

「かわいい……篤郎……篤郎」

私の体の力はガクンと抜け、倒れた。冷たい手が頬に触れる。意識が薄らいでいく。自分の名を呼ぶ声が聞こえる。猫の鳴き声が聞こえ、体の端から端を噛んでいるのを感じる。服の上から皮膚を噛み砕き、頭皮を引き裂いている。指の骨が折れるほど歯をたてている。

「あ……つ……ろ……う」

耳元で聞こえる。血の臭いがする。意識が遠のいていく。

透明な冷たい光が射し込んでくる予感だけがする。

聞こえないほど遠くで、動物の鳴き声が聞こえてくる。……猫なのか。

……徐々に、……もうすぐ鼓膜が破られていってしまう。